

【月刊】

# キャッチピース

153

通巻 230 号

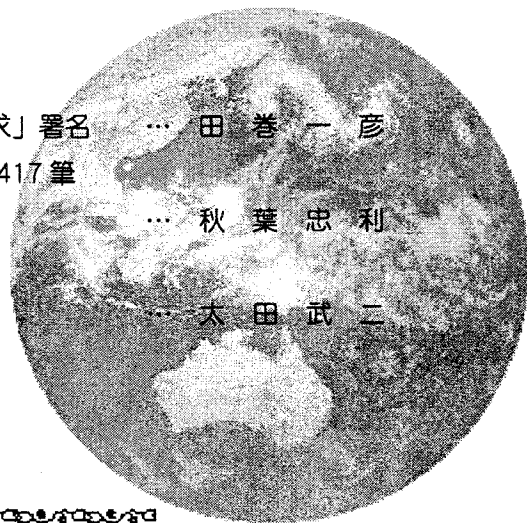
08/04/20



原子力空母の母港化ストップのため、住民投票署名を集めた横須賀の人達(2008.04.11「原子力空母の横須賀母港問題を考える市民の会」提供)

## この号の内容

- 横須賀・原子力空母「住民投票条例請求」署名 … 田 巻 一 彦  
52,417 筆
- 核兵器のない平和な世界を目指して … 秋 葉 忠 利  
< 2月10日藤野町での講演から >
- オキナワから トウキョウから … 太 田 武 二
- アフガニスタン便り



編集発行人 ● 脱軍備ネットワーク・キャッチピース

● 維持会員 (月額) 個人 1口 1,000円 団体 1口 2,000円 ● 参加会員 (月額) 個人 1口 500円 団体 1口 1,000円

● 通信会員 (年額) 1口 3,000円

(会費には本誌購読料が含まれます)

# 横須賀・原子力空母 「住民投票条例請求」署名、52,417 筆

## 市民の声は、 日本を飛び越えて米政府を動かすかもしれない

田 卷 一 彦  
(「キャッチピース」運営委員)

今年1月10日、米国の議会情報サービス(CRS)が出した「変化する日米同盟と米国の国益」(<http://www.fas.org/sgp/crs/row/RL33740.pdf>)と題されたこの報告書は、「米軍再編に対する地域的抵抗」が「日米同盟を一層強化するための困難」の一つとなっていると言う。具体的事例は三つ。普天間代替施設建設に抗議する住民の座り込み、岩国の住民投票、そして「空母を通常型から原子力に交代させることに反対する横須賀におけるキャンペーン」。報告書はつづける。「日本の中央政府は岩国と横須賀の自治体と合意を交わしたが、米軍駐留の負担をどのように分かち合うかという問題は、日本政府にとって引き続き難題となるであろう」。

日本政府も横須賀市長も、安全保障は国の専管事項なのだから、自治体や住民がそれに異論をさしはさむなどありえない、と市民の声に背を向けている。しかし、そのありようこそが「難題の種」なのだ、と報告書は米国の議員や政策決定者に投げかけているのである。

市民の抵抗に加えて、憲法上の制約や予算の不足、さらに加えて政治的指導力の欠如によって、日米同盟の強化が米国の思うとおりには進まない可能性がある。その場合にはこうするのも手だ、と報告書は「4つの選択肢」を示している。①日本独自の軍備増強を要求する。②在日米軍の駐留をさらに削減する。③人道援助、平和維持分野での自衛隊の活動拡大を奨励する。④多国的防衛協力枠組みを開発する。

報告書の意図は、「アジア太平洋における米国の国益」のために最もよい地域的な同盟関係を作ることで、「軍縮」ではない、④の意味は、日米同盟が当てにならないなら、インドやオーストラリアを巻き込んでNATO型の集団安保体制を作るということだ。

しかし、であったとしても「在日米軍の削減」すら、選択肢とされていることに注目して損をすることはない。この報告書が教えていることは三つあると思う。ひとつは、「日米同盟」を前提としても、原子力空母は「宿命」などではないということ、二つめは、日本政府との約束だけでは、米国は安心できない 地域住民の合意なくして米軍は「良き隣人」とはなりえないということ。三つ目は、横須賀、沖縄、岩国の地域世論は、米国のアジア戦略そのものに影響を与えうるのだということだ。

もし、市長と議会が「専管事項」論にたつて、52,417筆の署名を無視して、請求を拒否したならば、彼らは米政府以上に今の米戦略に固執する人々だということになる。米国の選択肢はずっと広い。

横須賀市民の奮闘に拍手を！そして支援の継続を！ただかいは、希望とともに第2ラウンドを迎える。

(たまき かずひこ)

## 5万人超の署名提出 市選管に 住民投票で是非求め



横須賀市選管管理委員会に提出した。市民団体は「原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」で三月六日から九日間集めた。メンバーは二〇〇六年冬も同条例制定を目指し署名運動を実施。四万一千五百九十八人分(有効署名三万七千八百五十八人分)を集めた。〇七年三月市議会に条例案が提出されたが、大差で否決された。今回は前回を一万人以上、上回った。共同代表の泉東正彦市長は「前回は五万人以上の署名を提出した」と語り、

5万人以上の署名を、横須賀市選管の青木邦明事務局長に提出する泉東市長(左)。

住民投票署名の応援に横須賀入りした井原前岩国市長(2008.03.29「市民の会」提供)



横須賀中央駅頭での署名活動(2008.03.06「ヨコスカ平和船団」提供)



横須賀中央駅頭での署名活動(2008.03.06「ヨコスカ平和船団」提供)



# 核兵器のない平和な世界を目指して

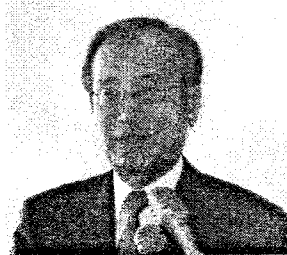
## — 21世紀は市民の力で問題を解決できる時代 —

広島市長 秋葉 忠利

ご紹介の通り、今日ここでお話しさせていただききっかけは、私の母が吉野（相模原市藤野町吉野）の出身だということです。

子どもの頃、ずいぶん昔のことになりますが、吉野に来たことがあって、今日すこし周辺を見てまわって、当時とはたしかにずいぶん変わってはいるんですけど、懐かしさがいっぱいです。

今日の講演は「平和都市広島と藤野・相模原市を結ぶ」というタイトルですけれども、ここでは皆さんに主に被爆体験の一部と被爆者のメッセージについてお話ししたい。それと被爆体験をもとに今、世界の都市が立ち上がるうとしているということをお話しさせていただければと思います。



公演中の秋葉忠利広島市長

### 被爆体験継承の重要性

被爆体験を忘れてはいけない、被爆体験を記憶してずっと未来の世代にも伝えていかななくてはならないということがひとつ私たちに与えられた責任だと思っています。被爆体験継承、なかでも一番大事なもののひとつが、被爆者のメッセージです。

広島市の平和公園の慰霊碑には「安らかに眠ってください、過ちは繰り返しません」という言葉が書かれています。それと同じことを、被爆者のみなさんのもっと簡単な言葉で「こんな思いを、他の誰にもさせてはならない」と表現しています。このメッセージの意味を私達がきちんと理解し、それを次の世代にも伝えていくことが大事だと思います。

「歴史は繰り返す」という言葉があります。これは、無条件に歴史が繰り返すということではありません。1905年にアメリカの哲学者ジョージ・サンタヤーナ

が言った言葉がもたっています。英語で読むとより解りやすいのですが、サンタヤーナは「過去を記憶できない者は、その過去を繰り返す運命を背負わされる」と言った、つまり、忘れ去った過去は繰り返されるんですよ、と警告したのです。過去の教訓をきちんと受け止めて記憶することで、過去を繰り返さないことが可能になるということです。

被爆者のメッセージで重要なのは「こんな思いを、他の誰にもさせてはならない」と言うときの「他の誰にも」の部分なんです。このなかには通常「敵」と分類される人々も含まれています。例えば広島と言えば、原爆投下を指示したトルーマン大統領、原爆を製造したオッペンハイマー博士や科学者達、その爆弾を実際に落としたポール・ティベッツ大佐(B29 エノラ・ガイ機長)、そういう人達も入っているということです。

自分達はこんな辛い思いをした、こんな苦しい思いをしたんだから、相手にも同じ思いをさせるんだと言えば、それは報復です。そうではなく、敵/味方という分類ができたとしても、そんな辛い苦しい思いは誰にもさせてはならないというメッセージになっているところが、とても大事なのです。なぜ、こういうメッセージが生まれたか。よくよく考えると、これにはとても深い意味があります。

被爆体験というのは、ほんとうに大変な体験なんです。原爆がつくりだした一まさに「地獄」と言ってもいい—その地獄はどんな言葉を使っても十分に伝えきれないほど酷い状態なんです。それをなんとか伝

えようとお互いに話しをしていくなかで、それほど酷い状態だったということを伝えるためには...と最後に出てきたのがこれで、その苦しみをつくった相手にさえこれを経験させてはいけない、という思いでした。被爆体験がそれほど酷い状態だったという意味がこのメッセージにはあることに気づいていただくと大変ありがたいです。

これは、今日お話しをする上でおそらく一番大事なことです。このメッセージを私達が理解し、そして次の世代にきちんと伝えていくことを主眼とする、それが大事だと思います。

### 被爆者の三つの功績

「こんな思いを、他の誰にもさせてはならない」この大事なメッセージに到る過程で、被爆者のみなさんはいろいろなことをしているんですけど、1999年の『平和宣言』（本誌6ページに掲載）ではそれを次の三つの功績に分けて説明したつもりです。

#### 《功績その1》

死を選んでも誰も非難できない地獄の状況下で、生きる道を選び人間でありつづけたこと：

原爆がつくりだした悲惨な状況というのは、常識をはるかに超えて、言葉で言い尽くせない酷い状況でありました。後で写真を見ていただきますが、その写真は我々の常識では考えられないあまりにも酷いものですから、それにショックを受けて、それで「十分に分かった」、我々自身の経験とあまりにかけ離れあまりにも酷い状況だから、それで「分かった」と思いがちです。今までにないような酷い状況だ、写真を見てそういう経験をすると、その先まで「分かった」ような気に我々はなりません。けれど、実はまだ『その先のこと』までは我々には分からないんです、それほど酷い状態だったんです。というのがひとつ、ここでは伝えたいことです。

常識が通用する世界であれば「生と死とどちらを選びますか」と問われたら、それは生を選びますね。だけれど、その常識が通用しない、死を選ぶことが当たり前、それが当然のような世界があるんだということを、まず理解していただきたい。

しかしながら、それでもそこで生きることを選んだ、それには勇気が要りますし、非常に強靱な意志の力が必要なんですけども、まずその大切さというものをぜひ理解していただきたいと思います。

被爆者のみなさんは当然、核兵器そのものを廃絶しなくてはならないと言いますが、我々それを受け止める側からすると、被爆者がそういうことを言うのは当たり前だと捉えがちです、そういう傾向があります。そうではなくて、被爆者が「核兵器は廃絶しなくちゃいけない」となぜ言っているのか、もう一度ゼロに戻って、出発点に戻って理解することを始めましょう。

#### 《功績その2》

忘れてしまいたい被爆体験を語り続け、核兵器の使用を阻止したこと：

被爆者は被爆体験を語り続けて—長崎以降、核兵器は使われていないのですが—核兵器の使用を阻止してきました。

被爆者はひどく悲しい体験をしているわけですから、そのことは「忘れない」と思うのが実は人情です。広島でも長い間、被爆体験を忘れない、今でも思い出したくない—思い出したくない、喋りたくない、忘れない、これらはちょっとずつニュアンスが違ってくるんですけど—やっぱり「忘れない」という気持ちがとても強く働いています。

例えば原爆ドーム、これは1996年に世界遺産に登

録されていますが、この原爆ドームを今の様な状態で残そうと決定した時期に、我々から見ると、外から見れば、その決定は当たり前だと考えがちですが、実は大変な議論があったんです。

原爆を思い起こさせる、1945年の8月6日を思い出させるようなどんなものも全部消し去りたい、原爆ドームなんか壊してしまい新しいビルを建ててほしいという声が強かった。そういう気持ちも一方には非常に強くあったんです。

それを、「いや、しかし、やっぱり後世には原爆の酷さを伝える建物も残しておかなくてはいけない」ということで最終的には残すことになりましたが、それは正しい決定だったと思います。けれども、そこで「原爆ドームは要らない、原爆を思い起こさせるようなものは全部消してしまおうよ」という気持ちも強くあったということ、それを理解することもとても大事なことです。

にもかかわらず、原爆体験を話す、それはまたその日のことを、8月6日以降のことをまざまざと自分の心の中に思い起こすことです。痛みをもう一度感じることで大変辛いことなんです。にもかかわらず被爆者のみなさんは自らの被爆体験を話し続けてくれている。そのことで核兵器は、長崎以降使われていない。その結論が非常に重要だと思えます。

ジョン・ハーシーというアメリカ人の作家がいます。1946年に広島を訪れ、6人の被爆者の人生を詳細に聞き取って、それをひとつのレポートにまとめてくれました。1946年の8月31日の『ニューヨーカー』という雑誌はこれその号のページがすべてそのレポートの掲載に当てられたんです。1日で30万部が売り切れてしまったというほど評判になりました。そのハーシーさんが1985年に広島に再度やって来たときにお話しをしましたが、長崎以降原爆が使われていないのは、まさに被爆者が自分達の体験を世界に語り続けてくれたからだということを彼は仰っています。

被爆者の体験を世界に伝えてくれたという点で、ハーシーさんの功績は大変大きいんですけど、それに関連してちょっと話しをさせていただきたいと思えます。

私はアメリカにずいぶん長い間、合計すると高校生ときの1年を入れて20年近く住んでいました。で、アメリカ人の、今でもそうですけど、典型的な原爆観というのは、まず最初に「パールハーバー」がある。「あの真珠湾攻撃があったから...」で、大体ほとんどの人がもうそれ以上の説明は必要ないと思っている。原爆投下について、大体アメリカ人の悔悟というのは固定化されています。

つまり、真珠湾攻撃は人間が考える、とりうる行動のなかで最低のものだというのが、アメリカ人の頭のなかにある真珠湾攻撃の位置づけです。ですから、アメリカについて何か酷いことが起きると、かならずパールハーバーと比較されます。これは9.11のテロのときも当然、出てきました。それ以降いろいろなことがありますけれども、何があっても、アメリカ人の心のなかでは、気温には『絶対零度』といって、それ以下には温度が下がらない一番寒い温度というものがありますが、それと同じような位置づけが真珠湾攻撃にもある。例えば日本人の誰かが広島の話をしたときに、「でもパールハーバーが先じゃないか」ということで、もうそれ以上の議論ができない。もうそれを言ったらすべての解答が示されてしまうような感じで、アメリカ人はパールハーバーのことを言います。

それはまあ、いろいろな形の解釈がありますがひとつの解釈としては、世界の状況を国と国との敵対的な関係というなかで見て、アメリカだけが最終的には優勢な位置にある、すべての善を代表するというような国家観が（アメリカ人には）あります。要するに、国家という枠組のなかですべてのことを解釈する、そのなかでの術計として（原爆投下も）出てきます。

けれども、ハーシーさんが書いてくれた『ヒロシマ』というレポートは、国家と言う視点や枠組はまったく捨てて、一人の人間が被爆後どういう人生を送ったのか、どういう生き方をしたのか、人間的な立場で被爆者6人の人生を淡々と、文体は簡潔なんですけど、非常に説得力のある形でまとめてくれました。

アメリカ社会に対して、国家と国家との対立、その枠組のなかでの原爆という位置づけではなくて、生身の人間が、アメリカ人と同じ人間が原爆（投下）の結果どういう影響を受けたか、どういう生き方をしているのかを大変公平に、つまり敵を...、悪い人間のよいところもちょっとは書いてあるということではなくて、一人の人間がこういう苦しみに出会ったときにどう反応するか、どう一所懸命生きようとしているのかをきちんと書いてくれました。

日本語訳は法政大学の出版局から出ているので、今でも参考になると思いますが、まだお読みでない方には一読されることをお勧めします。

《功績その3》  
復讐や敵対という人類滅亡につながる世界観を捨て、和解の哲学を創り出し実践したこと：

これは先ほど申し上げました「こんな思いは他の誰にもさせたくない」「させてはならない」という言葉が端的に示しています。自分達が苦しんだのだから、この苦しみを与えた人間をやっつけるんだというのは報復の哲学ですけど、そうではなくて、他の誰にもさせてはならないということが和解の哲学です。

そのことを被爆者のみなさんは、自分達の体験からの教訓だということによって世界にずっと発信し続けてくれています。実は、アインシュタイン博士が言った有名な言葉に「原子力はすべてのものを変えてしまう、唯一変わらないのは人間の考え方だ」というのがありますが、そこでアインシュタイン博士が考えていた「変わらない人間の考え方」というのは、国と国との対立関係、あるいは利己的な国家というのが自分の利益を守るために戦争をすることは当たり前だとするような考え方を指しています。

被爆者の和解の哲学は、まさにアインシュタイン博士の望んだ新しい考え方、それを被爆者のみなさんがもう自分達で実践している、その哲学をそのまま生きているということです。

(次号につづく)

【なお、本文は2月10日の講演の録音テープから原稿を起こし、読みやすく再構成したものです。講演内容を3回に分けて掲載する予定です】



### 講演会開催のいきさつ

私は10年ほど前まで藤野町の議員をやっておりました。辞める少し前に、秋葉市長が「母親は湖の畔の町に生まれ育った」ということを書いてるのを拝見しました。「湖の畔の町」と言えば、私の町が相模湖がどちらかだと思いついて、当時の藤野町長とか議員に尋ねてみましたが、どなたもご存じない、いろんな方に訊いても知らないということでごさいます。ようやく分かってきたのは一年近く経ってからですね。私の町の吉野というところにお母さんがお生まれになったんだということが分かって、そのご実家も分かりました。私も同じ地域に住んでいました、本当に近いところの方だということが分かりました。

度々テレビを通して、秋葉さんは当時は国会議員でいらっしゃいましたが、秋葉さんのお話しを聞いておりました。こういう方のお話しをぜひ町の人達みんなで聞くことができたならいい、とにかく秋葉市長のお母様が藤野のお生まれだということを手がかりになんとか話しがつけられないかと思っておりましたところ、これからはいよいよお願いしようと思っていた矢先に広島の市長として広島に行かれてしまい、私の夢はここで途切れてしまいました。

昨年選挙のとき県会議員をなさっている長谷川さんの選挙のはがきに推薦人として秋葉市長のお名前が載っていました。そこで長谷川さんにご存知の間柄なら、講演をお頼みできないだろうかと長谷川さんにお話ししたところ、「やあ、それじゃあ一緒にお招きしてお話を聞く会を開こうじゃないか」ということになり、長谷川さんが様々なご努力をしてくださいます、広島市長の秋葉さんをお呼びすることができたという次第です。

藤野町：人口約1万人の神奈川県北端の小さな町。西は山梨県上野原市、北は東京都の奥多摩に接する。昨年3月、相模原市に合併された。合併されたことによって、藤野町も相模補給廠、キャンプ座間など米軍基地をかかえることになったと言える。

[注釈]

(1)ジョージ・サンタヤーナ (1863-1952) George Santayana

スペイン生まれのアメリカの詩人・哲学者。ヘーゲル観念論の立場で美学・哲学を研究した。

「過去を記憶できない者は、その過去を繰り返す運命を背負わされている。」は

“Those who cannot remember the past are condemned to repeat it.” の訳。

(2)トルーマン大統領 (1884-1972) Harry S. Truman

第34代副大統領、1945年4月ルーズベルト大統領の死去に伴い第33代大統領に昇格。第2次大戦の戦後処理に精力的に働く。ポツダム宣言発表の1日前、1945年7月25日、共和党の大物議員や軍指導者達の原爆使用反対を押し切って原爆投下命令を下す。日本への原爆投下の決定には、戦争の早期終結のほか第2次大戦後の国際情勢を考え、ソ連に対するアメリカの軍事的優位を誇示する意図もあったとされる。後年、日本に対して計18発の原爆投下を承認したことがワシントン・ポスト紙にスクープされている。

(3)オッペンハイマー博士 (1904-1967) J. Robert Oppenheimer

アメリカの物理学者。ブラックホール生成の研究の端緒を開く。1943年にロス・アラモス原子爆弾研究所長に就任し、マンハッタン計画 (1942年～) の責任者として原爆開発で指導的役割を果たす。45年7月16日最初の原爆を完成し「原爆の父」と呼ばれる。

ニューメキシコでの核実験 (トリニティ実験) の結果に戦慄し、原爆を実際に使用することには強く反対したが受け入れられず、最初の原爆が広島に投下された。(→ “The Day After Trinity”) 後年、「我は死なり、世界の破壊者なり」(「バガヴァッド・ギーター」) と自称したヴィシュヌ神と自身の姿を重ね、核兵器開発を主導したことを後悔したとされる。47年プリンストン高等研究所長に任命されるが、米ソの核開発競争がエスカレートするなか核の国際管理を提唱、水爆の開発に反対しエドワード・テラー (後に「水爆の父」と呼ばれる) と対立、53年「赤狩り」によって公職追放となりFBI監視下に置かれる。

(4)ポール・ティベッツ大佐 (1915-2007) Paul Warfield Tibbets, Jr.

アメリカ空軍パイロット。爆撃機B29の機長として、テニアン島から出撃、広島への原爆投下を遂行した。好戦的な思想には否定的な態度であったが、原爆投下については軍人としての当然の任務と自負し、戦後も原爆投下を正当化しつつ (→ “Atomic Cafe”)、良心の呵責を見せることも、謝罪することもなかったとされる。爆撃機B29の愛称にはティベッツ大佐の母親の名前エノラ・ゲイがつけられた。

(5)ジョン・ハーシー (1914-1993) John Hersey

アメリカのピュリッツァ賞作家。「20世紀アメリカ・ジャーナリズムの業績トップ100」の第1位に選ばれた。その著『ヒロシマ』は、史上初の原爆被害記録であり、第1章～第4章は6人の被爆者の体験や見聞を聞き書きし、世界に原爆の惨禍を知らしめた。第5章「ヒロシマその後」は、85年に広島を再訪した後に加えられた。

(6)アインシュタイン博士 (1879-1955) Albert Einstein

ドイツ (後にアメリカに亡命) の理論物理学者。相対性理論の基礎をほぼ独力で築きあげる。1907年有名な公式E=mc<sup>2</sup>を発表。1921年ノーベル物理学賞を受賞。32年ナチスの迫害を逃れてアメリカに亡命。39年、ハンガリー出身の亡命物理学者レオ・シラードの依頼を受けて、当時ナチス・ドイツが原爆開発に着手し始めたのではないかと、コンゴ産出のウランをベルギーがナチス・ドイツに輸出するのではないかと危惧される状況のなかで、原爆開発を嘆願するルーズベルト大統領宛書簡に署名する。が、マンハッタン計画には関与していなかったために、原爆が広島、長崎に投下されるまで原爆製造の事実すら知らなかった。広島、長崎の惨状を知り、ルーズベルト大統領宛の書簡に署名したことはもちろん、原爆開発の理論的根拠となった相対性理論 (E=mc<sup>2</sup>) を発表したことにも後年良心の呵責を感じつつあったという。55年哲学者バートランド・ラッセルらと共に核兵器の廃絶を呼びかけ (ラッセル＝アインシュタイン宣言)、バグウォッシュ会議を創設する。

[資料]

# 1999年 広島平和宣言

戦争の世紀だった20世紀は、悪魔の武器、核兵器を生み、私たち人類はいまだにその呪縛から逃れることができません。しかしながら広島・長崎への原爆投下後54年間、私たちは、原爆によって非業の死を遂げられた数十万の皆さんに、そしてすべての戦争の犠牲者に思いを馳せながら、核兵器を廃絶するために闘ってきました。

この闘いの先頭を切ったのは多くの被爆者であり、また自らを被爆者の魂と重ね合わせて生きてきた人々でした。なかんずく、多くの被爆者が世界のために残した足跡を顧みるとき、私たちは感謝の気持ちを表さずにはいられません。

大きな足跡は三つあります。

一つ目は、原爆のもたらした地獄の惨苦や絶望を乗り越えて、人間であり続けた事実です。若い世代の皆さんには、高齢の被爆者の多くが、被爆時には皆さんと同じ年ごろだったことを心に留めていただきたいのです。家族も学校も街も一瞬にして消え去り、死屍累々たる瓦礫の中、生死の間をさまよい、死を選んだとしてもだれにも非難できないような状況下において、それでも生を選び人間であり続けた意志と勇気を、共に胸に刻みたいと思います。

二つ目は、核兵器の使用を阻止したことです。戦争や紛争の度に、核兵器を使うべしという声が必要起こります。コソボでもそうでした。しかし、自らの体験を世界に伝え、核兵器の使用が人類の破滅と同義であり、究極の悪であることを訴え続け、二度と過ちを繰り返さぬと誓った被爆者たちの意志の力によって、これまでの間、人類は三度目の愚行を犯さなかったのです。だからこそ私たちの、そして若い世代の皆さんの未来への可能性が残されたのです。三つ目は、原爆死没者慰霊碑に刻まれ日本国憲法に凝縮された「新しい」世界の考え方を提示し実行してきたことです。復讐や敵対という人類滅亡につながる道ではなく、国家としての日本の過ちのみならず、戦争の過ちを一身に背負って未来を見据

え、人類全体の公正と信義に依拠する道を選んだのです。今年5月に開かれたハーグの平和会議で世界の平和を愛する人々が高らかに宣言したように、この考え方こそ21世紀、人類の進むべき道を指し示しています。その趣旨を憲法や法律の形で具現化したすべての国々そして人々に、私たちは心から拍手を送ります。

核兵器を廃絶するために何よりも大切なのは、被爆者の持ち続けた意志に倣って私たちも、「核兵器を廃絶する」強い意志を持つことです。全世界がこの意志を持てば、いや核保有国の指導者たちだけでもこの意志を持てば、明日にでも核兵器は廃絶できるからです。

強い意志は真実から生まれます。核兵器は人類滅亡を引き起こす絶対悪だという真実です。

意志さえあれば、必ず道は開けます。意志さえあれば、どの道を選んでも核兵器の廃絶に到達できます。逆に、どんなに広い道があっても、一歩を踏み出す意志がなければ、目的地には到達できないのです。特に、若い世代の皆さんにその意志を持ってもらいたいです。

私たちは改めて日本国政府が、被爆者の果たしてきた役割を正当に評価し援護策を更に充実することを求めます。その上で、すべての施策に優先して核兵器廃絶のための強い意志を持つことを求めます。日本国政府は憲法の前文に則<sup>のこ</sup>って世界各国政府を説得し、世界的な核兵器廃絶への意志を形成しなくてはなりません。

地球の未来のために、私たちが人間として果たさなくてはならない最も重要な責務が核兵器廃絶であることをここに宣言し、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げます。

平成11年(1999年)8月6日

広島市長 秋葉 忠利



嘉手納基地の戦闘機 F-18 ホーネット (リムピース提供)

### 桜の開花に想う

今年は、遅れるかも知れないといわれていた桜の開花宣言。しかし、地球の温暖化と都市のヒートアイランド現象の凄まじさで、何と3月22日には、千代田区の気象庁と九段の靖国神社の桜が開いてしまいました。その日は、午後から芝公園で行われたワールドピースナウの集会とアメリカ大使館に向けてのデモに参加し、組合関係や市民運動関係の知人、友人達との再会を楽しみ、命どう宝ネットワークの署名集めをさせてもらいました。しかし、本当は会場内での署名は禁止だったのではないかと随分後になって気がついたのですが、それこそ後の祭り。お陰様で4月4日の151回目の署名提出では、久しぶりに370名という大勢の声を日本政府とアメリカ大使館に届けることが出来ました。

その後、桜満開から桜吹雪の散り乱れる中、世間では浮かれない気分の方で、政治、経済、社会情勢の先行きの暗さを予感させる雰囲気人々が沈み込んでいくような感じです。そんな中で、春の選抜高校野球が行われ、沖縄に9年ぶりの優勝旗が渡りました。それも9年前に優勝投手だった若い監督の強運に率いられた沖縄尚学高校ということで、久しぶりに明る

い感動が沖縄中に広がりました。その9年前の優勝時には、沖縄から米軍基地がなくなるより先に高校野球の優勝旗が海を越えてきたという苦い嬉しさを皆で喜び合ったことを思い出します。どちらもそう簡単にはできっこないという想いが強かったからでした。

### 米軍基地被害への痛憤

甲子園球場のグラウンド上で澁刺としたプレーと魅力的な笑顔でわれわれを魅了した若者達に比べ、この9年間で変わることのない米軍基地による被害の数々を思うと、複雑な想いに駆られます。13年前、静かで安心して勉強できる沖縄を返してくださいと訴えた女子高校生とこの2月11日未明に米兵によって性暴力を受けた女子中学生の痛憤を想うと肝苦(ちむく)りさ!と叫ばずにはいられない気持ちです。

事件発生からしばらくして、女子中学生が告訴を取り下げ、米兵は釈放されました。セカンドレイブとなるマスコミなどの悪意の報道にどれほど彼女と家族が苦しみ、悔しさと怒りに沈んだらどうか。想像するだけでも、居たたまれない気分です。しかし、そのまま落ち込んでいては人間としての責任、義務からの逃避でしかありません。そうした思いをもって沖縄で、

「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」が2月23日、北谷町の北谷公園野球場前広場で開かれました。この時期にしては寒さを感じる激しい雨の中、女性団体や教育関係、労組などの市民団体、地域住民ら約6000人が参加。その後も続発する米兵犯罪や基地被害と言葉だけの謝罪を繰り返す米軍、そして政治の責任を放棄して対米関係に神経を使うだけの自公政権に対する厳しい怒りと批判が溢れていたそうです。

その集会では、神奈川県で米兵に暴行された在日オーストラリア女性が登壇。「被害者として黙ってられない。心の傷は残っているが、この場に来て私は一人じゃないと思えた」と語り、会場内に静かな共感の輪が広がったそうです。彼女は3月13日、東京の星陵会館で平和フォーラムが開いた集会にも参加し、日本の警察によるセカンドレイブと不起訴処分の不当性、更に加害者の米兵に対して民事訴訟で勝訴した闘いの報告、そして肝心の米兵がアメリカに逃げ帰っているために判決が履行できない不当性を訴えていました。

そして大会実行委は、構成99団体の代表らに呼び掛けて50名の代表要請団を結成し、4月14日、15日、首相官邸や衆参両院議長、外務省、防衛省、在日米大使館に要請行動することになっています。

その後も横須賀の米海軍兵士のタクシー強盗殺人事件が発生し、また、沖縄でも海兵隊、米軍関係者の犯罪が続発し、政治家や米軍責任者の言葉が如何に実効性のない空疎なものか、改めて明らかになっている中、東京でも同じ2月23日に、有楽町マリオン前での情宣行動と集会、デモが取り組まれ、約200人が参加しました。

### さまざまな集会、イベントから

2月23日の中野北口公園では、高江のヘリパッド反対のキャンペーンイベントが随分前から企画され、高江からも参加してコンサートとアピールなど多彩な表現が繰り広げられたということです。

また、この4月6日には、一坪反戦地主会関東ブロックが中心になって実行委員会を結成し、防衛省に対する人間の鎖行動が行われました。文字通り桜吹雪の舞う中で、約600人の参加者が3回手をつなぎ、ヘリ

基地反対協の安次富浩さんと軍隊基地を許さない行動する女たちの会の高里鈴代さんも沖縄から参加し、県民大会での沖縄御万人の怒りと決議の中身を防衛省に突きつけていました。

行動への参加者は、防衛省前の歩道を壁に沿って長く手をつなぐことになるので、私の場所からは限られた人としてしか挨拶を交わすことができなかったのですが、平和フォーラム関係の労組に加えて全労協、争議団関係の労組が幅広く参加しただけでなく、神奈川、千葉、埼玉など首都圏一円から市民運動の仲間達が駆けつけていたようです。

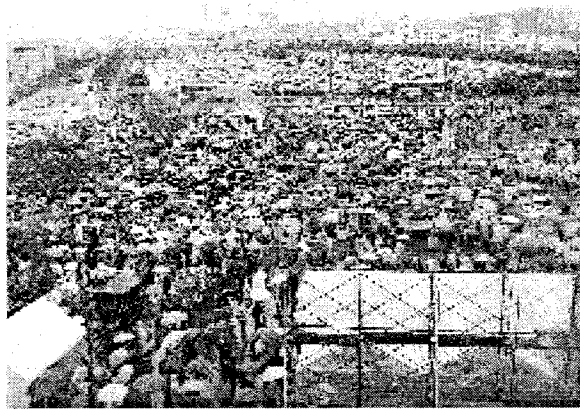
首都圏での今後の闘いは、沖縄からの上京団が来る14日に、星陵会館での連帯集会が予定されていて、その後はこの8月19日に配備が強行されようとしている横須賀への原子力空母ジョージワシントンの母港化阻止に向かっていくことになります。

### 政府中央の本当の問題は

そんな中で今、マスコミでは、新年度に入ってガソリン暫定税率の廃止に伴うガソリン値下げと地方経済の混乱が強調されています。福田首相を始め自公幹事長が口をそろえて民主党と野党の無責任さを追及する場面が強調されていたという印象は、私だけの穿った見方だったのでしょうか。

そして、日銀総裁をめぐる混乱の中でもねじれ国会という決まり文句が与野党に対する政治不信を煽る形で報道され、民主党を中心とする野党の政権担当能力を疑わせるような世論操作が蔓延している感じです。逆にねじれ国会という政治状況を昨年の参議院選挙で国民の多数が生み出したお陰で、道路特定財源、年金問題を初めとする自公政権の悪政の数々が暴かれて来たと言う前向きな報道は殆んどないというのがマスコミの惨状を表していると思います。

そうした政治不信を煽る一方で、この間の日米軍事再編という自衛隊と米軍の一体的強化については、全くといっていいほどの報道規制がなされています。それはアメリカを中心とした世界経済の混乱から破綻に連動して、円高、株安、原油高、そして債権=国債暴落という日本経済の破綻が予想される危機的状况に対応する仕掛けが準備されているという気がしてなりません。



米兵によるあらゆる事件・自己に抗議する県民大会  
(2008.03.28「ジユゴンの家」より)

歴史は繰り返すといわれていますが、第二次世界大戦に突入する前の世界恐慌と政治不信に軍拡競争という悪のトライアングルにはまっているというのは、私の杞憂でしょうか。

### 思いやり予算の期限切れをめぐる

そうしたマスコミ報道の一方、日米地位協定で米軍負担と決めている米軍駐留経費を、日本が支出してきた「思いやり予算」が期限切れになり、初めて空白になることは殆んど報道されていません。この「思いやり予算」とは、元々沖縄返還時の密約による米軍への裏金が底をついた1978年から始まり、ちょうど30年間も日米地位協定違反のまま支出されてきた代物です。その総額は、ほぼ10兆円前後になるはずですが、その他米軍関係全体で言えば、その何倍にも上る税金が米軍の為に浪費されてきたのです。例えば、軍人の場合、階級によって毎月約17万から28万円の住宅手当と、使用量に関係なく光熱費約5万円が支給され、公務員や技術者などの軍属も約30万円も、そして、駐留米兵一人当たりの経費総額は、1000万円を軽く越えるというのです。

そして、今年度の予算編成方針の段階で、思いやり予算の削減を求めている政府に対して、米国防衛省は猛反発。具体的には思いやり予算の百億円の削減と協定の有効期間を二年に短縮するという提案が、最終的には数億円規模の削減と三年延長で決着したと言われています。

1月11日に衆議院で強行された自衛隊による米艦船への燃料無料提供法案やこうした贅沢三昧の思いやり予算などは、対米従属、奴隷根性丸出し政治としかいいようがありません。年金、医療、生活保障全般の負担増とサービス減など国民生活の厳しさが募る中、福田政権への批判が高まり支持率低下となるのは当たり前でしょう。にも拘らず今回の空白を受けて「だれが特別協定の承認を遅らせているのか、米国に直接見てもらう必要がある。外務委員長から委員会の質疑を傍聴してもらうよう米大使館に要請すべきだ」という自民党幹部からの暴言があったというのです。これこそ戦後この方一貫した対米従属政治、経済のなれの果てである奴隷根性を正直に表したものであるとして、本来ならば一面トップ記事とすべきものだと思えます。

### 「集団自決」に関して勝訴

もう一つの間、焦点となっていた沖縄戦の歴史教科書問題に係る裁判の判決が出されました。座間味、渡嘉敷島で起きた「集団自決(強制集団死)」は戦隊長が命じたとする本の記述をめぐる大阪地裁で争われていたもので、原告の座間味島の戦隊長だった梅澤裕氏(91歳)と渡嘉敷島の戦隊長だった故赤松嘉次の弟秀一氏の名誉棄損の成立を認めず、原告の請求を棄却しました。この裁判は、2005年8月大阪地裁に提訴され、昨年問題になった文部科学省の教科書検定に大きな影響を及ぼしたものです。判決では、「集団自決には旧日本軍が深くかかわった。元少佐ら(梅澤裕及び赤松嘉次)の関与は推認できるが、自決命令があったとするには躊躇を禁じえない」として命令についての判断は避けています。

しかし、梅澤氏について、「自決命令があった」などとする体験者の証言を「実体験に基づく話として具体性、迫真性を有するもの」と認め、自決に軍所有の貴重な武器だった手榴弾が使われたことなどを指摘。「梅澤氏が集団自決に関与したものと推認できる」としています。

また、赤松氏については、赤松氏がスパイ容疑で住民を処刑したことを指摘。米軍上陸後、北山陣地近くに集合した住民の元へ手榴弾を持った防衛隊員が現



座り込み日1448日(4/5、那覇行動HPより)

れた行動を「赤松氏が容認したとすれば、赤松氏が自決命令を発したことが一因ではないかと考えざるを得ない」としています。

この判決をバネに文部科学省への検定権の撤回を求めていかなければならないという想いと同時に旧日本軍の非人間性について改めて思い知らされたという感じです。

この裁判や昨年の検定問題が起こり、沖縄では戦後60年以上生き残った辛さを抱えたまま黙っていた戦争体験者の方々が、初めて証言をされました。もしくは、金城重明さんのように強制集団死が戦争と軍隊の支配の中で起こったことを告発し続けて平和の為に身を裂くようにして証言し続けてきた方も改めて法廷で証言されました。

その方々が搾り出すようにして話される言葉一つひとつには、自分の近くで亡くなった親兄弟、子ども達や大人人々の命が張り付いている様な重さが伝わりました。その厳しさに耐えられないからこそ、話すことを封印して戦後60年以上生きて来たということだったと思います。

それらの中には、ミスユニバース準優勝の知念くらさんの祖父が始めて彼女に打ち明けたという沖縄でのテレビ報道も記憶に残っています。

それに比べて、日本軍の守備隊長であったり、軍の幹部だった軍人達の戦後はどうだったのかと問い直すとき、何とも暗澹たる想いに駆られます。梅沢、赤松両氏の戦後の言動と今回の提訴から見えてくることは、そこまで人間は醜く自分に執着して生きられるものかということです。言葉を変えて言えば、生き恥を晒すという自覚のなさや日本軍人としてのプライドが

相俟って偉そうにすればするほど見るに耐えない哀れみすら覚えるのです。

それだけに、この老人達をけしかけて訴訟を起こし、教科書検定で政治問題化しようと裏で企んだ「新しい教科書を作る会」や右翼評論家達に対する怒りは、なんとも抑えがたいものがあります。

### 3月1日を労働運動の行動日に

最後に、最近組合で読んだ資料の中に印象に残る一文がありました。

それは、3月1日を日本の労働運動の焦点の行動日という趣旨の文章で、1919年の3月1日の朝鮮民衆の独立蜂起の日という歴史と現在の運動主体の関係を表現したものでした。そして来年が、朝鮮民衆の独立闘争から90年という節目にあたる日に労働運動としても何らかの行動をすべきだということだったと思います。

それを読んで私が感じたのは、やはり琉球・沖縄との関係でした。つまり、来年という年は、薩摩侵略から400年、1879年の琉球処分から130年という節目ということです。また、その3月1日は、非核独立太平洋の日でもあり、ピキニデーと言う第五福電丸の被爆と同時に南太平洋の島々とそこに暮らしていた島人(しまんちゅ)が人体実験として被爆した日であることとも繋がっています。

私(たち)は、日本と米国の植民地下で続いた長年の差別と戦争、軍事基地による悲惨な歴史を根っこから転換するために非武装琉球ネシア連邦への独立を果たしたいと想い、運動してきています。その独立運動は、朝鮮、アジア、太平洋の民衆が生き抜いてきた歴史と現実としっかりと運動するものでなければ成功しないと思っています。逆に言えば、「海と大地と共同の力」で生きられる拠点と民衆のネットワークがあれば独立を果たせるということです。

全くの蛇足ですが、来年は私(たち)が60歳の還暦を迎え、私の所属している新運転という労働事業の労働組合が50周年、日本で最大の労働組合のナショナルセンターの連合がちょうど20周年を迎えるということで、私(たち)の闘いと人生にとって絶好の変わり目に当たる1年にしたいと決意しています。

(おた たけじ)

## アフガニスタン便り

**私**がアフガニスタン入りした昨年の5月上旬、ジャララバード周辺の田園地帯には日本で言うあの「麦秋」の景色が広がっていた。この時期、摂氏

50度を越す日中の厳しい暑さを避けて、農民が日の出前の暗いうちから農作業をしている光景が、車で用水路建設の作業現場に向う途中よく見られる。畑では女も鎌をもって仕事をしているが、素顔を人目に曝さないための彼女達のさりげない身のこなしには感心する。

**麦**の収穫でこの時期どの農家も忙しくなると、日雇いを求めて用水路建設の作業現場に集まって来る男達の顔ぶれが変わる。年齢がいきなり若年化するのだ。大人の男達は多くが農繁期の野良仕事に出るため、替わって十代の少年達が1日100アフガニ (= 240円)の日当を稼ごうと集まってくるからだ。といて、自分の小遣い稼ぎのためではない。稼いだ日当は少年達が好き勝手に使える彼らの小遣いにはならない。その日稼いだ日当は家長に渡し、家計に組み込まれることになっていると聞く。

**日**雇いを求めて集まる少年達にかぎらない。年端のいかない子ども達でも、ここアフガニスタンでは農作業の手伝いはもとより、家畜の世話、水汲み、薪集め、衣類の洗濯、食器洗いなど実によく働く。たぶん、労働それ自体が「生活のため」という労働本来の目的とは別に、家庭の躰や社会教育の主要な手段になっているのだろう。かつては、日本もそうだった。



一日の労働を終えて日当をもらう日雇いの作業員達。100アフガニ紙幣を手にして、どの顔もうれしそうだ。大人に混じって十代半ばの少年達の姿が目立つのは、農繁期(小麦の収穫)の農作業に従事する大人に替わって少年達が日雇いの仕事を求めてくるからだ。少年とはいえ、仕事ぶりは一人前だ。(2007年5月)



**水**汲みは子ども達の大事な日課だ。村の共用の井戸には近くの農家の子ども達が毎日幾度も水を汲みにやってくる。男の子は水の詰まった容器(20乃至は30リットル)を肩に載せ、あるいはネコ車に載せて運ぶが、女の子は水の詰まった水瓶(5~10リットル)を頭に載せて実に器用に歩いて運ぶ。なかには華奢な体で水の詰まった20リットルの容器を頭に載せる女の子もいて、その頸椎と脚腰の強さにたまげる。

(2007年8月)

**分**水路(用水路本流から畑に水を送るための小さな水路)沿いに植えたヤナギの発芽状況を見て歩いていると、向こうから少年達がやって来た。見るとススキの穂を抱えている。クナル川の河原や中州に茂っていたものだ。何をするのか尋ねると、少年の一人(写真中央)が手に持っている藁を見せてくれた。ススキの穂を材料にして藁をつくるのだ。自然にあるもので利用できるものはなんでも利用する生活の知恵を小さい頃から少年達は学んでいる。

(2007年9月)

## アフガニスタン便り フォト



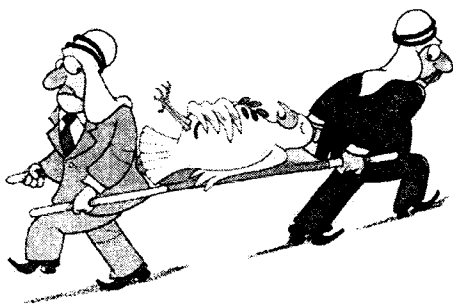
「和平への足並み」

拍架に乗せられた平和の鳩は瀕死の状態  
といひのり

拍架を運ぼうとする二人の進む方向は  
まったく正反対、

これじゃあ助かる命も助かるまい。

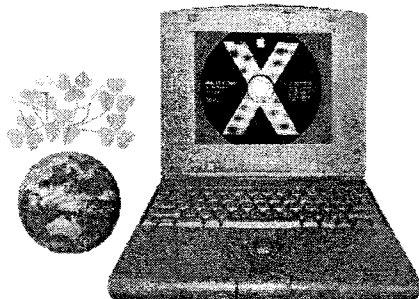
それUN Preventable Deathだ！



編集室から

◎またまた、おわびです。先号と先々号のキャッチピースの文字が極端に小さかったのです。読みづらく、ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません。気がついていながら対策を講じず、「手抜き」とのお叱りは、実にその通りです。今回、改善をはかりましたが、いかがでしょうか。

◎4月に入って野山の野草・樹木が一斉に花を咲かせています。カタバミ、スミシ、ホトケノザ、オオイヌノフグリ、カタクリ、クサノオウ、ケマン、ハコベ、ヒメオドリコソウ、カタクリ、モミジイチゴ、ヤブツバキ、ヤマブキ、ダンコウバイ、ヤマザクラ…枚挙に暇のない百花繚乱。長閑で平和な田舎の春です。



会計報告 (08.03.06 ~ 08.03.26)

【収入】

1 先月からの繰越	264,521
2 当期の収入	14,000
(1)会費収入	
①維持団体	0
②維持個人	0
③参加団体	0
④参加個人	0
⑤通信会員	14,000
(2)カンパ収入	0
(3)運動収入	0
(4)預金利子・資料収入	0

【支出】

3 当期の支出	43,312
(1)郵送費	31,068
(2)文具・備品	3,844
(3)振込手数料等	280
(4)分担金	0
(5)ロッカー代	6,120
(6)雑費・備品	2,000

【残高】

4 次月への繰越	235,209
----------	---------

月刊「キャッチピース」 発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース 編集●キャッチピース編集委員会  
連絡先●232-0065 横浜市港北区高田東 3-38-15 田巻一彦方 電話●fax●045-531-1341 / e-Mail: QZT04441@nifty.com  
郵便振替口座●00160-7-136148 「キャッチピース」 定価●100円 (通信会員年間3,000円)